



「95歳の現役女将」

おかみ
あさのしずこ
浅野 静子

1919年(大正8年)
江戸川区谷河内生まれ、
一之江在住



■ なんであたしが

父の友人が毎晩のように家に来て、頭を下げて言うんです。「しずちゃん、行ってくんねえ、うちの親戚のところに嫁に行ってくんなよ」。すると父も「静子、行ってやれよ、かわいそうだから」。あの頃あたしは、その話をされるのは嫌で嫌でたまりませんでした。

相手の家は、お菓子と酒の量り売り商売。中気(脳卒中)で半身不随の父親と、酒好きで年中酔っぱらっている母親。病人と酔っぱらいじゃねえ、誰も嫁に来ないですよ。金はないし、ただ家があるというだけ。店の1日の売上げが30円か40円でしょ。それで現金仕入れしたらいくらも残らない。「いくらかわいそうだからと行ったって、なんであたしが」って思いました。

昭和16年、形だけのお見合いをし、結婚の話が決まったころには、お菓子はやめて酒の量り売りと飲食店(居酒屋)になっていました。うちの人は数えの28歳、あたしは24歳。自分で働いて貯めたお金、83円が持参金でした。

当時、お店は夕方5時からでないといけない。酒も野菜も自由に仕入れるのではなく配給だから、量も種類も限られているので、毎日商売することもできない。4日やったら1週間くらい休む。営業できるのは月に10日くらいでしょうか。お店を開ける日は、夕方になると人がいっぱい並んでいるんです。「今日は100人だよ」とか「今日は50人だよ」と券を出すんです。お酒は1人お銚子2本だけ。酒が1升2円、酒の肴さかなが40~50銭の時代でした。当時はうちの近くにも飲み屋がたくさんありました。でも、配給がなくて商売をやめた人もいます。

飲み屋の仕事だけでは食べていけないので、ミシンを4台買って「1時間いくら」で「貸しミシン」をやりました。当時は「徴用」といって国民は強制的に動員させられ、一定の業務に従事させられたんです。うちの人は、昼間は徴用で三鷹の通信機器工場に勤務し、夜はうちの店で働いたんです。商売していて夜遅いのに、朝早く勤めでしょ。普通の人じゃ、とっくに身体を壊していますよ。

■ 進学したかったけれど

あたしが生まれたのは江戸川区やごうちの谷河内。小学校にあがる時に、谷河内の分校より本校がいいだろうということで瑞江みずえ小学校に通いました。父は自分の両親が亡くなると農家を廃業し、瑞江小学校のそばに住居を移したんです。父は東京都の測量技師で、母は文房具・味噌・醤油・酒、何でも扱うお店をやっていました。父親は勤めに行っちゃうでしょ。やっぱり、あたしが店を手伝わなきゃ駄目だ。

学校のそばなので、朝、生徒が鉛筆とか消しゴムを買いにくる。あたしは学校へ行く前にも店番をしていました。学校は休まずに通い、尋常小学校、高等小学校と8年間精勤賞をもらいました。受賞者はたった1人でした。

あたしは進学したかった。親に内緒で女学校の試験を受けたんです。「しず、何だい、これは」「ああ、バレちゃったか。試しにやってみたんだよ」。あたしは7人きょうだいの長女。妹が1人、弟が5人。妹は生まれた時からからだが弱く、早くに亡くなりました。弟たちが生まれる時、お産の手伝いもしました。店も忙しく、弟たちもいる。とてもじゃないが上の学校には行かれない。それで、早稲田の講義録などを取り寄せて勉強しました。でも、忙しくて勉強する時間が少なかった。

昭和12年(1937)、日中戦争が始まったでしょ。父が「家にいたら、徴用でどこに引っ張られるか分からないぞ。だから早く勤めちゃえ。そうすれば大丈夫だから」と言うんです。生活困窮者の面倒をみる「方面事務所」って、昔あったんです。それで、家の近くにあった方面事務所に勤めました。お給料は30円、丸の内の厚生局まで取りに行きました。1銭を使う時代でしたから、お給料としては良いほうでした。仕事が終わって家に帰れば、店の手伝い。事務所には2年間勤めました。

その後、父が「手に職をつけたほうがよい」というので裁縫を習いました。先生のところに来る呉服屋さんから頼まれた浴衣生地を自分の家に持ち帰り、夜中の12時までやって何枚か仕上げ、翌朝持って行く。貯まったお金が持参金となりました。

逃げちゃおうかな

結婚後、夜になると、どうしてこんなところに来ちゃったのかしら、本当にえらいところへ来ちゃったと思った。挙句の果てに、うちの人は結婚して半年で兵隊に行っちゃったでしょ。半身不随の義父に湯たんぽを入れてあげただけで、義母はヤキモチ妬くし、そのうえ配給の酒飲んじょうし。でもそんなこと言えないしね。だからだといつまでも飲んでるので、食事の後片付けができない。何でこんな苦勞しなくちゃなんないのかと思った。うちの人もいないし、何度も逃げちゃおうかと思いました。

男の人がみんな兵隊に行っちゃって誰もいないから、自転車の後ろにリヤカー引いて、配給の酒類を取りに行くんです。お酒の種類によって、それぞれ配給所が違いました。焼酎は浅草、日本酒は小岩、生ビールは両国。今の焼酎はプラスチックに入っていて軽いけど、昔は甕ですから重いですよ。焼酎甕5つも積んで、中川新橋なんてまともにはのぼれないです。当時、生ビールは、軍需工場に勤めている人しか飲めませんでした。

野菜の配給は小松川警察署のところ。配給といってもトマトの2つや3つ。病人に食べさせたら、もうないですよ。毎日、店を開けるわけではないけど、店の支度が大変だった。酒の肴もないので、自転車で浦安まであさり、行徳までねぎを買に行きました。警官が要所、要所に立っていて、配給以外の物は見つかったら没収されてしまうんです。

昔は、他のお客様に因縁ふっかけて、ただでお酒を飲もうという「たかり屋」がいた。義母はいたけど、何も言えない人だから。あたしだって、性格がきつくなる。相手は、みんな男ですからね。

昭和20年3月、両国からリヤカーに生ビールを載せて、小松川橋を渡り切りとうしたら、空襲警報が鳴り始めたんです。「おばさん、何やってんだい、空襲警報が聞こえねえのか」。警備員に早く避難するよう言われたけど、家には、子どもと病人がいるので早く帰らなきゃ、避難しているわけにはいかない。松江小学校を抜けたところで、学校に爆弾が落ちたんです。もう少し橋の上でごたごたしていたら直撃くらっていたかもしれない。

うちの人は、マラリアと栄養失調で戦地から帰されました。それからが大変だ。一度に食べさせると食傷しちゃうので1日に5、6回お粥を作って、おかずも栄養になるものを吟味して作り、半年かけて治しました。あたしの弟が大学に行って帰ってくると、手伝いに来てくれたんです。その弟も早くに亡くなっちゃってねえ。

戦後は配給も解除になり、夜遅くまで商売ができるようになりました。閉店時間は午後10時だけけど、お客様がいたら11時頃になってしまう。それから掃除、洗濯。昼間に年寄りのもの、夜は子どもと自分たちのものを洗う。寝るのは午前2時、向かいの豆腐屋さんの灯がつく時間。うちの人が帰ってきて、病人だと思うから、結局はあたしが船頭になっちゃうのね。自分

ながら、よくやれたと思いますよ。

お客様と共に

店の名は大衆酒場「カネス」といいます。最初は菓子屋でした。創業は昭和7年。ちょうど江戸川区が誕生した年だそうです。昔、農家はその家の印として農具に焼印を押したんです。「カネス」はその名残。昔は茅葺屋根の大きな家でした。空襲の時、屋根に燃え移った火にお客様が水をかけてくれ、それで助かったんです。

昭和39年、東京オリンピックの年に建て替えました。当時3階建ては珍しく、建築許可を取るのが大変でした。店の前を走っていたトローバスも、今井街道の交通量が激しくなり、架線のスペースがなくなったので昭和43年に廃止されました。お店に飾ってある茅葺屋根の家やトローバスの写真などは、お客様が撮ったものです。

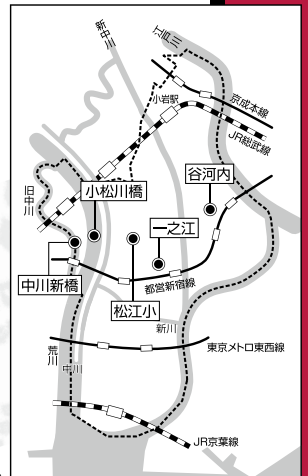


◆昭和30年代の「カネス」

うちの人は、朝、自転車で築地の魚河岸まで仕入れに行っていました。「今日はすいぶん遅いなあ」と思っていると、「松江でパチンコをしているよ」って、お客様が教えてくれるんです。また、うちの人は「急いで行かなくちゃ、年食ったらどこにも行かれない」とか言って、どこへでも行きたがりました。ハワイ、カナダ、アメリカ、ヨーロッパ、中国、香港、マカオなどを一緒に旅行しました。「俺は一度戦争で死んだんだから」が口癖の人でしたが、83歳まで生きました。

あたしはこんなに長生きをするとは思わなかった。子どもは5人いますが、お店は長男夫婦が継いでいます。あたしも毎日、閉店時間までお店に出ています。お客様と話をするのが楽しみ。お客様もいろんな人が来ますからね、いろいろな情報が得られます。昔のお客様とは、よく話し込んだものです。

これからもからだの続く限り、コの字型のカウンターの中に入ってお客様と話し、お客様を大切にしていきたいと思っています。毎朝、体操をして腰を伸ばすようしています。腕立て伏せも10回はやっていますから。



◆インタビュー／2014年8月
◆聞き手／小宮和枝 村田正子
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)